〔東京家政大学研究紀要　第41集　(1), p. 35～44, 2001〕

人間学的教育理論の考察と教育の現代的課題

—不登校児への人間学的援助の研究に関わって—

川瀬　八洲夫*, 小林　由枝**

(平成12年10月5日受理)

A Humanistic Education Study and an Educational Issue at present

—Concerning the study on facilitate for children of no attendance by humanistic support—

Yasuo KAWASE and Yoshie KOBAYASHI

(Received on October 5, 2000)

キーワード：不登校，虐待，人間学的援助，教育的現代的課題

Key words : no attendance, abuse, humanistic educational support, educational issues at present

はじめに

少子化が進んだ子ども達を取り囲む現代の日本社会は，諸外国に比べて政治的な安定性，経済的な豊かさ，犯罪発生率から見ても，社会的な安全性等高い水準にある．このような状況にあって，子ども達は健全に保護・育成されているように見える．しかし，豊かな社会の陰では，現代の子ども達は，不登校・いじめ・虐待・非行・ひきこもり・心身症・異常な攻撃性・過度のストレス・自殺・アパシー等の現代的な病理的問題にさらされている．こうした問題の中でも，近年特に増加の一途をたどっているのが，不登校である．学校不適応対策調査研究協力者会議 (1992) では[1)]「どの児童生徒にもおこりうるものである」との視点から不登校問題を把握し，対応していく必要性を指摘した．このような現状の背景には，社会(学校や家庭から離れた場での他の人との関わり，生活，遊び，さまざまな関係を有する地域や場等) 学校，家庭，個人・人間関係における複合的構造的ひずみが考えられる．また，健康な心身の発達に欠かせない，自然や生命への畏敬の念，創造性，豊かな情緒性，真・善・美に対する正当な情緒・感性が形成されていない現状がある．そのため，無気力・無感情・現実逃避・不安等の非人間的な性向が生じているのである．

日本社会の現代的特質は，国際紛争などにより生命が危機に侵されることや，民族，人種，宗教，各種の社会的差別などによる危機・対立の深刻さなどがあるということではなく，組織や団体，個人などの物質的な「利益の追求」が中心の社会になってしまっていることにある．そして，その結果として「道徳観」，「良い人生」，「生きがい」，「真の幸せ」等の人間性追求の精神・態度が見失われてしまっているのである．豊かな人間性を育てるために重要な時期である子ども期・発達課題遂行期を過ごしている子ども達も，この例外ではない．今，学校においては不登校，いじめ，学級崩壊などがいろいろなレベルでみられる．そして，子ども達は普段の学校生活であっても，友人同士，教員などとの関わりに，過度のストレスを受け，緊張しているのである．子ども達は，想像以上に，精神的・心理的な危機的な状況にあり，のぞましい人間性を育てるための環境の中で育っているとは，いい難い状況にある．これらのことから，豊かな人間性開花の教育機会の喪失に遭遇している不登校児に対し，人間形成の視点と思想にもとづいた理論である人間学的教育学理論から，援助の視点として，多くの重要な示唆が

*　教職教養科　教育史研究室

**茨城県結城市スクールソーシャルワーカー

得られるものと考えられる．

Ⅰ．不登校児の諸問題

不登校(non-attendance)という言葉は，研究者によりさまざまな意味で使われている．臨床的一般用語としては，怠学(truancy)，学校登校拒否症(school phobia)，神経症的登校拒否症(neurotic school refusal syndrome)，登校拒否症(neurotic school refusal)などという用語がある．臨床的特殊的タームとしては，分離不安(separation anxiety)，情緒的欠席(emotional absentism)，母親従属症候群(monther-following syndrome)，教育恐怖症(pedago phobia)学校回避(school avoidane)，学校離脱(out of school)等の用語が使われているのである．これらの用語には，類似点もあれば，大きな相違点もあり，臨床的一般用語として，または現象的用語として，区別されないままに使用され，混乱が生じている現状でもある．[2)]

そのため，本稿では不登校児の定義を最初に明らかにしておきたい．本稿では，児童が本心から学校を拒否しているのではないという理論に関わって，「不登校」の用語を使用し，また，論題として用いた「援助」は，弱者への "help" ではなく，子どものもつ内的可能を手がかりにして，子どもの成長・発達を背後から手助けして促進するとの意味から "facilitate" を用いたい．

不登校の研究は，1950年代に研究が報告されるようになり，歴史も新しいということができる．しかし，不登校の研究の推移を考察することは，その時代の不登校児を明らかにする上で必要なことであり，また，捉え方と援助法を考察する上で意義があると考えられる．不登校児の研究の推移は，大別に次の4つの時期に分けることができよう．[3)]

Ⅰ期-1950年以降は，アメリカでの精神分析的な見方がそのまま受け入れられ，不登校の本質は，未分化で依存的な母子関係における分離不安にあり，その不安が学校に置き換えられたものであるとの見方が主流である．

Ⅱ期－1960年以降では，これまで現象的にみられた母親との分離不安が，学校または，登校時にしか現れないことが報告され，母親との分離説の批判が起こり始めた時期といえる．また，不登校児の特徴として完全主義的傾向と特有の人間関係が報告され，不登校児にとって性格や人格形成をすすめた家庭の問題に，原因がおかれている研究が多く見られる．

Ⅲ期－1980年以降は，様々な研究・援助が行われているにも関わらず，不登校問題の急激な増加が起こっていることから，社会状況や学校状況に要因があるとしている研究が多く報告され，学校病理説が中心に報告されている．しかし，単純に学校に原因を求めている場合と，学校の構造に問題があるのではないかとの，捉え方に違いが見られる．

Ⅳ期－1990年以降は，我が国の不登校児問題は，さらに増加しつづけ，文部省からも「不登校は，誰にでも起り得るものである」との見方がなされ，不登校現象が一般化してきた．また，これまで研究されてきた不登校児の特徴では，説明できない，学校に無関心な児童が多くなっているとの報告もされている．[4)] また，不登校問題の原因は一つに特定することができず，また，増加の一途をたどっていることからかも，個人に原因があるのではなく，大きな枠組みである，学校や社会に根本的原因があるとの見方が重視されている傾向があるといえる．

現在の不登校児の現状を明らかにするべく，不登校児を取り囲む背景の学校に着目し，実際に行われている援助を明らかにしたい．その方法は，学校現場に，教員，保健室，スクールカウンセラーの3点に注目し，聞き取り調査を行ったものである．[5)] 子ども達と日々触れ合う，教員には，概して生徒を抱えこむ傾向が指摘され，そのことが問題解決を困難にしている現状もみられる．教員自身，このことを理解している者もいるが，「頭で理解するものの，自分の学級の児童の問題は，担任の責任」という意見が多く，既存の考え方は根強く残っている現状である．その反面，子どもの問題への対応に多様な意見や報告が混乱している現在，不安を抱えている教師が多く，専門家の援助や，研究会などを求める声が多く聞かれ，援助法を模索している現状も見られる．援助法を明らかにするため，教師自ら，研究会などを行っている学校もみられたが，「時間の余裕がない，つくれない」などの理由から，継続が困難であるといった課題も見られる．しかし，教職課程や研修会の内容などから考察するにあたり，今までの生活指導法とは異なる，カウンセリングという視点でのスキルや意識は，向上しているということができる．

いま，子ども達の“居場所”とさえなっている各学校の保健室は，子どもとの信頼関係が築きやすい場であることがいえる．子どもとのニュートラルな立場，また，

自分の悪いところをなおしてくれる先生というイメージから，暗示の効果があるのでないかと考えられる．

現在，学校内の相談施設として，スクールカウンセラーが配置され，相談室，または，情緒学級という名前で配置されている．これは，1995年文部省スクールカウンセラー事業（正式にはスクールカウンセラー活用調査研究委託事業）として，学校現場に導入されたのが始まりである．この事業は，聖域視されていた公教育の学校現場に教育改革の一環として，外部の専門家を導入したということが画期的である．日本では，学級担任は教科指導と生徒指導の両者に責任を負う教育システムをとってきたが，不登校研究の推移でも見たように，不登校問題が，もはや，社会の問題とされ，学校内だけでの対応では難しくなってきたことをあらわしている．

スクールカウンセラーの仕事は，多様性があり，カウンセラー個人のスキルやパーソナリティーが大きく関わるものである．そのため，効果や機能が順調であるかなどの問題に対しては，一般的に言いきれない現状があるが，派遣校が増加している現状からも，効果が認められていることがいえる．

Ⅱ．人間学的教育学理論の特質

人間学的教育学とは，第二次世界大戦後，主として西欧を中心に提唱されてきたさまざまな教育理論の中でも，注目されている代表的な理論の一つである．この人間学的教育学の基底となっている人間学は，20世紀の特別な精神史の状況の中で，哲学の特殊な部門として生まれたものである．これは，もともと哲学の間で使われるようになった言葉ではあるが，人間に関する個別科学の領域でも用いられている．この理論の根底となっている，哲学的人間学が提唱されるに至った事情を考察していくと，個別的な科学領域の発展によって研究一考察の対象である人間が“断片化”された結果，研究が進むにしたがい，トータルとしての人間の本質がないがしろにされてしまうという，逆説的な事態に対して，人間を一つの統一的全体として捉えようとする動機が第一に指摘できる．人間を統一的にみようとする動機は，当然人間についての諸現象の根底にある人間あるいは人間存在の本質的なものへの問い，さらには世界における人間の独自な地位への探求をよび起こすものである．そうして，人間であることの本質，他のいかなる存在とも異なる人間に，独自な特質を自覚させ，もたらそうとする人間の自己探求の営みとして，人間学の概念は成立してきたといえるのである．[6)]

この人間学の概念の成立を詳しく見ていくと，それは20世紀に生まれた言葉ではあるが，それ以前の古い歴史に遡ることができる．人間は，存在する限り，死と運命に脅かされてきたため，自分の存在の意味を問い続ける必要性があったのである．この問いは，人間が存在している間，持続されてきた現在的問いでもあり，人間存在の根本的課題である．また，これらのことをカント(Kant.I)は，「私は何を知ることができるのか？ 私は何をなすべきなのか？私は何を希望してよいのか？」と三つの問いを発している．[7)] そして，この問いの上に，「人間とは何か？」と尋ね，哲学的な根本の問題として，人間学を哲学の独立の一部門，それも基本的な部門として構想している．人間学が哲学の新しい一部門として必要であるとした理由には，私たちが現実に生きていく生活世界についての哲学的理論がなければならないからである．しかし，このような理論を伝統的形而上学も数学的自然科学も提供できないと考え，この人間学をカントは「世間知」“Weltkenntnis”と定義づけている．[8)] この世間知にいたるためには「通常の経験」や一定の「文献」，あるいは「友人たちとの交わり」「旅行」「旅行記の読書」「世界史・伝記類・演劇や長編小説」といった人間学的な補助手段を全面的に利用しなければならないのである．世間知は，豊かな人間的な経験や同胞に対する敏感な同情を重視し，それによって道徳性や美学に対して親近性を獲得するとしている．カントが構想している本来の人間学は，人間の魅力に満ちた具体性そのものを全体的にとらえて，アプリオリに人間を全体的に規定しようと試みているものなのである．

現代の西欧では，主としてボルノー(Bollnow.O)，ロート(Roth.H)，ランゲフェルト(Langeveld.M.J)などにより同時代的に論理化された理論である．人間学を提唱したカントは，ルソー(Rousseau.J.-J)の『エミール』と汎愛派の教育思想に基づいて論じた，『教育学』(Uber Padagogik)の著書の中で，「人間は教育されなければならない唯一の被造物である」と人間にとっての教育の意義を強調し，「人間は教育によってのみ人間となることができる」という命題をだしたのである．この命題は，現代の人間学的な教育学の基本命題ともされている．

こうした哲学—実存哲学を背景に，ボルノーは，近代

哲学の合理主義，理性主義的傾向を批判し，孤独や不安や挫折の中で悩む人間の諸感情や，虚無からの脱出，個人的な自由の尊厳などを軸に，新しい生の可能性の探索を試みている．[9] こうした視点から，新しい教育論を提起しているものが，人間学的教育である．

人間学的教育理論の代表の思想家であるボルノーは，方法論的にはディルタイ理論（Dilthey.W）の解釈学を発展させている．ディルタイ的な解釈学は客観的文化財を優れた人間性の表現とみなし，文化財の理解を通して，人間に迫ろうとしている．しかし，これまでの解釈学が十分に現実の人間事象を評価し得ず保守的に流れてきた傾向をやめ，教育的にも，豊かな新しいものが，人間の経験から生まれてくるものであるとしている．または，諸人間学を教育的視座から統合する道が，必ずしも明確ではないが，必要性と重要性ををあげ，試みているのである．これらを著書『人間学的に見た教育学』（Anthropologische Padagogik）(1968，第二版）において，人間学的教育学の独自な成果として，「教育的雰囲気」を重要な問題として論じている．教育を人間生活との関連から正しくとらえることを試み，教育をしようとする者とされる者との感情の状態が非常に重要だとしている．教育を成し遂げるには，生活環境のなかの特定の精神的な風土と，それに関係する者の，特定の感情の状態が要求されることがある，としている教育をする場合の精神的な風土と特定の感情を重視し「庇護の感情」，「楽しい気分」，「愛と信頼」，「忍耐」などの精神的な雰囲気を重要な問題として論じているのである．[10]

「庇護の感情」は，教育的に効果のある雰囲気の基本的な形である．これは，家や家族の保護の囲いのなかで庇護されているという感情であり，信頼のできる世界のなか，安全に行動できることの本能的な意識である．子どもが正しい形で育つためには，このような庇護されている感情は必要である．このことに関連してボルノーは，ニチュケ（Nitschke.A）が指摘した，幼児期の成長に対する信頼の意義を例示して強調しているのである．子どもに世界と物へのつながりを可能にする認識の諸力は，愛や信頼する人間の媒介によって開かれるとしている．しかし，子どもは，絶対的な「絶対の庇護」はあり得ないことを認識することがあり，庇護されているとの感情も壊れていく．なぜなら，子どもに庇護を与える大人達は，欠陥を持った不完全な人間だからである．子どもは，この時，守ってもらうものもなく，脅威にさらされていることを感じる．この脅威は，子どもの成長によい影響を与えるものではないため，脅威に対する安全と信頼できる居場所を取り戻すために学び，会得する必要性があるのである．子どもにとって，私達にとっても重要な課題であり，成熟し，自立する者の全般的な課題になっている．敵対的な世界の脅威に対決するこの力は，庇護の感情のもとでしか育たないという点からも重要である．[11]

次に，「楽しい気分」をつくることも重要である．「楽しい気分」とは，成長のための第１の最高条件であり，子ども・人間の幸福で，悩みのない，不安や心配を背負っていない，心の本質的な気分である．気分とは，心の表面の戯れではなく，そこからあらゆる仕事が生まれ，それらを持続的に一定のものに保つ土台である．教育をおこなう者には，この気分を守り，保ち，避けがたい障害の後にこれを取り戻させることが，要請されている．また，この気分には，楽しいものと悲しいもの，高揚されたものと抑圧されたものとの本質的な対立があり，人間生活のあらゆる態度がここに結びついている．暗い気分の自己では，日々の生活全体が暗くなり，外界へのつながりを持ち，それを保つ力がなくなり，自分のなかに閉じこもり，興味も関心もない萎縮した生活を送る．逆に楽しい気分は，生活全体が明るくなり，新たな生活へと目覚め，外界への関心と活動への喜びが生まれてくるのである．この対極的な気分の異なった作用は，大人よりも子どもの方が，気分の影響に支配されるという点で，本質的な意味をもっているのである．また，気分の影響力は教育の成果に作用するだけではなく，人間のあらゆる諸力の発達にも作用するものである．そして，教育者はこの効果的な気分を促すように努力し，逆に有害な気分からこれを遠ざけ，また克服するように助けることを注意する必要性があるのである．[12]

また「愛と信頼」という要素は重要である．ここでの「愛」と「信頼」とは，教育者と個々の被教育者を結びつける具体的な「人間関係」のことをさしている．教育をなすためには，教育を必要とする個々の子どもに愛を注ぐことが重要である．愛についての共通点は，あらゆる意志的な教育の意志の前に，一度は自然のままの姿で見て認識し，教育者は子どもに対して，先入観を持たず，期待通りに成長しなくても失望することなく，独自な成長のための活動の余地を自由に与えなければならないのである．この関係の不可欠の前提として，信頼がある．一般的な信頼の雰囲気のことだけではなく，教育者が多

くの困難と失望にもかかわらず，繰り返し子どもに与える具体的な信頼であり，子どもはそれを信じることで，強い形成力を持ち，楽しい気持ちで仕事に取りかかるのである．教育者がその子を信じなければ，その子は自分でその課題に取り組む勇気を持たず，自分の力を試すことはないのである．これらのことを，ハルトマン(Hartmann.N)は，『倫理学』のなかで，信頼とは「他人のなかに信じたそのものを，その他人のなかに実際に生み出す」創造的な力であると主張している．[13] このことは，教育者が子どもから読みとる情報の傾向が，同時に子どもの成長を導く方向を生み出し，意味をあらわすことを指摘しているのである．つまり，子どもを立派で，信頼できる，やる気十分なものと見なせば，それに応じた性格が子どものなかに目覚めて強められるのである．逆に，子どもを嘘つきで，怠け者とみなせば，子どもはこれに抵抗することなく，嘘つきで，怠け者となるのである．これらからも理解できるように，教育者は，子どもに対する自分の疑いに早くから負けないように，用心する必要性があるのである．[14]

また，信頼は自由で予測できない態度をとる一人の人間に向けられているものであるため，自然法則のようには作用しないものである．そして，信頼は全て失望させられることも，当然あることを理解することも必要である．しかし，教育者にとって，この失望の危険は避けられないものであり，繰り返されるものであるため，どれほどの失望をうけても，また子どもに対して信頼を抱くことを学ぶ必要性があるのである．子どもは，信頼に守られてのみ，良きものに向かって成長するものだからである．つまり，子どもに持っていた真の信頼が裏切られて失望しても，教育者は，たえず自分の心のエネルギーから信頼の勇気を湧きあがらせ，子どもを信頼し続けることが重要なのである．

こうした理論の重要な視点は，教育者はあらゆる不可解な後退と失望にも勇気を失わないように，大きな心の安定が必要であり，これらに基づく，「忍耐」も必要であるということである．忍耐は，教育者にとって大きな美徳になり，忍耐の欠如は，人間・教師としての大きな欠陥なのである．子どもの未熟さと練習不足から，課題が終わらないとき，また，教育者の計画通りに物事が進まないとき，教育者の認識の違い等に，怒りやあきらめによって，忍耐を失う危険性がある．ここでの忍耐とは，無関心や冷たい客観性とは別のものであり，教育者のペースで急いで押し進めたりすることではなく，子どもの成長と共に，注意深く歩むことなのである．教育者は，待つことを求められ，自分自身の意志を捨てて成長する者に時間を与えることを，心得ている必要がある．つまり，忍耐とは，高度の自己克服が求められているものであり，個々の不意の出来事や失望を超越して自分の仕事に自信のある者にのみ，可能である．また，世界や人生へのゆるぎない信頼は，個々の行為のすべてに含まれ，究極の根底において支えられていると感じることができる重要なものである．[15]

これまで述べてきた教育的雰囲気のほか，実存哲学から得た重要な概念がある．人生の流れを中断し，不安をかき立てる強烈で突然な事件を「危機」と呼び，重要な概念としている．この「危機」は，病気や精神，超個人的，経済，社会，国家間等のあらゆる領域においても起こるものとしている．しかし，人間学的に考察して危機は，人間の人生の中で，ある役割をしているため，人間にとって必然的な，生活の一部であるとしているのである．[16]

危機は，どの瞬間にも破局を迎えるものであるが，避けることができるものでもある．しかし，人間は危機を通してのみ，成熟し，内面的な自立が得られるため，危機を避けたり，危機に対して受け身ではいけないのである．だからといって，教育者は，危機の効果をねらって導入することも誤っている．なぜなら，危機は，めぐりあわせのものであり，意のままにできないからである．また，意図的な「作為」の効果も限界があるのである．しかし，危機を通り抜けなくては，新たな段階への移行はあり得ないため，教育者は危機の本質と意味への深い洞察が必要なのである．そして，危機の意味を教え，受け止め，避けることなく，危機から解放されるまで持ちこたえるように，該当者を助ける必要がある．これまでの生活や過去への批判と対決への，契機と鼓舞・激励，援助は，教育的役割があり，危機を乗り越えた子ども達は，大きな教育的効果を得るのである．

人間学的教育は科学や技術，知識優先の現代文化，現代社会への強い批判を基としている．科学・技術・知識の優先の文化，これに基づいてきた現代の教育は，教育の成否が人間そのものではなく，達成・蓄積された知識の量として，究極的にはものとして評価されている．そして，こうした教育では，人間を主体的・個性的・本質的存在として見るよりは「あれ」，「それ」として見なし

てきた傾向がある．つまり，現代社会を特徴づける科学・技術主義・商業主義・合理主義は，人間を機械の部品化，商品化，競争的視点から見て，人間性を失わせる傾向に向かわせてきたのである．このような状況から，現代の人間は，人間としての自己の無自覚・孤独・挫折感・絶望感・虚無感へと駆り立てられてきたのである．結果，人間は自己の良心への問いかけ，他者への配慮，思いやり，道徳観という人間的体験を枯渇したことが，学校問題や犯罪の低年齢化等，目に見える形でもあらわれてきているのである．現代社会は，このような意味から考えると，一種の危機社会である．こうした危機に対抗し，人間性回復の教育を試みているのが人間学的教育なのである．また，人間学的教育学では，従来の教育を客観的教育として考え，こうした教育は「あれ」「これ」「それ」のものとして捉えた教育として批判し，主観的教育の重要性も主張しているのである．主観的教育とは，人格的主体としての我と汝の関係を主張した，「我と汝」の教育である．教育を受ける者は，「あれ」「これ」「それ」というものではなく，主体的人格を重視することに重点をおいているのである．[17)]

また，人間らしくなるための教育の可能性と必要性は，初めから人間の身体の成り立ちの中に深く根ざしていることを，さまざまな面から指摘していることを理解する必要がある．このように，人間を人間の本性としての存在として，価値あるものとして教育を考えていこうとすることに，人間学的教育学の本質があり，人間の本性－意志・感情・愛・希望・不安等の根元的感情－の回復と強化を目的としている．また，現実の人間をものとしてみている，教育への反論でもある．この理論は，事物的存在とは異なる人間の主体性，人間の本質，存在の仕方を探求してきた実存哲学を背景にしている理論である．近代哲学のあらゆるものへの合理主義，理性主義傾向への批判として，孤独や不安のなかで悩む人間の諸感情や，虚無からの脱出，個人的な自由の尊重などを軸に，新しい生の可能性を模索しているものである．[18)]

Ⅲ．子どもへの援助
―不登校児への人間学的援助の現状―

日本では，急激に学校内での心理的問題，いじめ，異常な攻撃性，飛行，自殺，不登校，心身症，アパシー，引きこもり等深刻な問題が増加している状況にある．これまでは，これらの問題に対して「生活指導」として教師が対応する方法がとられてきたが，1995年にスクールカウンセラー制度が導入され，子どもに対する，学校内での対応の方法が異なってきている．文部省のスクールカウンセラー活用事業は，いじめや不登校等への対応として，学校内，子ども達の臨床心理についての高度の専門的な知識と経験を有するカウンセラーを，小・中・高に設置し，学校内におけるカウンセラーの機能を強化しようとしたものである．カウンセラーの選考基準は，「財団法人日本臨床心理認定協会の認定にかかる臨床心理士などを有するもの」とされている．主な仕事内容は，児童生徒へのカウンセリング，保護者や教員等関係者に対する助言・援助，子どものカウンセリング等に対する情報収集，児童生徒へ必要と思われる機関への紹介などである．カウンセリング以外にも，コンサルテーション，コーディネーションと多岐に亘り，学校内での子どもへの援助を行っているのである．

また，これらのような学校内に行われた援助とは別に，複雑化・多様化する子どもの問題の中でも，特に増加している不登校児に対して，1991年度に不登校・ひきこもり児童対策モデル事業を，各児童相談所で実施している．この援助は，国で実施されているもので，各県によって多少この事業の呼び方は異なっているが，「ふれあい心の友（メンタルフレンド）訪問援助事業」と呼ばれ，主に「メンタルフレンド活動」と呼ばれているものである．不登校児は，ひきこもりがちになる傾向が見られ，人との交流が苦手な子どもが多いが，人は他の人と出会って自己の確認をし，人は人との交流のなかで，悩みや苦しみ，あるいは喜びなどや生きていることを実感し，どう生きていくか学習するものである．そのため，家庭にひきこもりがちな不登校児は，人生の一番大きな変化の時期であるいわゆる思春期に，人との交流ができないため，その後の人格形成上，大きなハンデになりやすい．そこで，友人として子どもと交際を通じ，ひきこもり子どもに対してよい影響を与え，子どもが抱えている問題を克服し，成長を援助していく活動である．必ずしもカウンセリングなどの専門的技能は求められていないものである．

これらの子どもは，孤独に苦しんでいたり，良い友達に恵まれないものが多く，一般的に親や教師など上下の関係で本人に働きかけるのではなく，平等の友人として，ともに喜びや悲しみを分かちあい，さまざまな体験から，正しい価値体系を修得させようとするものである．

この事業は，前述したように，全国の児童相談所で行われているが，活動内容については，地理的条件，人材的条件，各地域の考え方等によって，各児童相談所ごとに多少の違いはある．

論者（小林）は，前述のメンタルフレンド活動をするメンタルフレンドとして約三年間，茨城県の児童相談所のもとで，また，約二年間は東京都の児童相談所のもとで，援助活動をおこなってきた．

(1) 目的

ひきこもり・不登校児に対して，子どもの兄または姉の世代に相当する大学生等を「メンタルフレンド」として家庭に派遣し，子どもや保護者とのふれあいによって，その子どもの自主性や社会性の伸長，学校意欲の回復などをはかる．

(2) メンタルフレンドの登録と派遣

メンタルフレンドは，児童福祉に理解と情熱のあるおおむね18歳から30歳未満の男女で，児童相談所が募集し，必要な審査を行い，研修を実施し，適当と認められた者を登録する．メンタルフレンド派遣は，児童相談所，家庭児童相談所等で相談に応じたひきこもり不登校児童や，各関係機関や本人の希望により，この事業の対象者として児童相談所所長が認めたものに対して行う．実際派遣されている子どもは，主に閉じこもりの子どもに対してであるが，家庭と児童相談所との関係が安定し，初期の不安定さから脱出し，エネルギーや関心が外界に向かい始めた時期の子どもが多い．また，閉じこもっている子どもの場合，保護者との面接を通じて状態を把握し，家庭訪問を行っている．

(3) 活動時間

メンタルフレンド活動については，子どもの状況を見ながら行うが原則として週１回，一時間程度である．その日の活動の終了にあたっては，メンタルフレンドから話をする．次回の予定については，子どもと相談の上，自由に設定する．初回は，予定について児童の意見が聞けない場合もあり，その時は，保護者との間で日程を調節することも可能である．

(4) 活動内容

子どもの家庭を訪問し，子どもの話し相手になり，ゲームやスポーツを行い，時には親からの相談にのることもある．受容の姿勢で対応し，指導が難しい場合には担当の児童福祉司に連絡をし，相談・協議しながら指導を行う．具体的な活動内容については，その時々に応じて子どもと話し合い，自由に決め，一緒に外出すること等もある．

東京などの都市圏では，子どもと児童相談所で活動を行い，公共の交通を利用し，外出することが活動の中心となっている．しかし，地方などでは，交通の便の悪さから，児童相談所に集まること自体が難しく，ほぼ家庭訪問という形態で行われている．地域の特徴によって，多少内容は異なる．

メンタルフレンドの活動を終了する場合は，児相が判断する．活動途中，メンタルフレンドの事情により活動が困難になった場合は，別のメンタルフレンドに変更する場合もある．活動の終了は，児童相談所で行われている事業であるため，原則として18歳までとしている場合が多い．[19)]

Ⅳ．人間学的援助の理論と実際

前述で述べたように近年，不登校児への援助施設の増加，スクールカウンセラー導入などの，援助活動の増加が見られ，子ども達の問題が増加している現状がある．これらの問題が増加した背景には，学校，家庭，社会における身体的，心理的，情緒的，社会的・文化的背景があげられるが，個人によって様々な要素が，複雑的に絡み合っているため，その事由は一概には定めがたい．しかし，個人的な事情や気質的なものとは別な部分で，こうした子ども達の根底には，現代社会特有の問題傾向があるといえる．現代社会では，多くの組織体－企業，官庁，各種団体，学校－などは，管理体制下に秩序づけられ，管理運営されている．この管理運営の目的，内用，方向は，ほぼ画一的に定められたものであり，周囲との競争を避けられないものになっているのである．この競争では，本質的に「利益」が優先されていたため，現代社会の諸矛盾が発生したことを認識してはいたのではあるが，急激な対策を行わずにきてしまい，現在の状況に至っていると考えられる．

また，現代の日本社会の子どもの特徴は，学歴社会が根づよく，子ども達は塾通いと受験競争の過当化にさらされている．そのために，社会の価値観が，良い学校に入ること，良い企業に入ること，お金を持っていること等，人間そのものの価値ではなく，一面的な価値でしか見ることができない状況が子どもにも見ることができる．これは，人間としてもっとも本質的な問いとしての「良い人生とは」「幸せとは」「豊かさとは」「生きがいとは」

の根源的な追求が，ないがしろにされており，これらの問いを重視すべき，教育過程においても同じ状況である．そのために，子ども達は，健全な人間形成に欠かせない個性，創造性，生命や人間への畏敬の念，及び，自然・社会的環境やそれを構成する高尚で美しいものに対する正当な関心（interest）が育てられていないのである．そして，人間形成に必要なものや，物事に対する感激，感動，関心のない無気力，無関心というアパシー（apathy）的性格が早くから形成されてしまうのである．また，現代社会には，学校や家庭という発達・発育・人間形成の場に，他の非人間的・非人格化の要因がありすぎるため，人間的体験の欠如，人間関係の希薄性も形成されてしまっている．そして，社会の家族生活の形も，核家族化，近所づきあいをしない生活，少子化，ITの流通，人間関係を築くための時間的ゆとり等も，人間関係希薄性を形成している要因である．

人間関係の希薄性は，人間にとって，特に成長過程の子どもにとって大きな意味を持つものである．子どもの時に人間関係を学び得なかった場合，その後，会得する事は困難を生じるものと考えられる．人間形成や成長に重要となる人間性は，人間どうしの関わりによってのみ獲得できるため，人間関係の希薄性は，人間関係の重要なカギになるのである．

人間性をもつということは，人間であるために必要なものであり，他には，知性，理性，道徳，技術，身体的能力などの能力を，バランスよく持つことが必要になる．また，この能力を否定や破壊といった方向にも使えることを理解し，否定や破壊といった方向に向かわないように留意することも必要である．

現在，子ども達の問題にさまざまな援助がされているが，要因はそれぞれに異なり，複雑なものであるため，マニュアル的なものを作成することは難しい．しかし，どの援助法の根底にも流れているものは人間性であり，人間性が弱まってきた現在，人間性の強化を目的とした人間学的教育学の必要性が考えられるのである．

本来，自ら成長する力を持った子ども達が，順調に欲求をのぼれるように援助していくためには，援助者自身が，技法以前の人間性を，自ら育むことも必要とされている．そのために，自分自身の内面に常に向き合い，変化に直面した場合でも，責任がとれるように，勇気を出して学んでいくことが常に重要であり，課題でもあるのである．援助者は，子どもをトータルな人間存在とし認識し，念頭におくことを重視することが必要であり重要である．子どもを，何かしらの面からのみ観るというスタンスであっては，子どもの成長を促していく可能性をも見落しがちになる．また，援助する場合には，時間的にも空間的にも多くの制約にとわれている現状理解する必要もある．しかし，それに巻き込まれたまま，「われとそれ」の機械的な関係を結び続けてはならないのであり，ブーバー（Buber.M）のいう「我－汝」の関係であるべきである．そのためには，援助をする機関の枠を越え，教育や社会全体を視野に入れた，より高次な人間中心のパラダイムを持たなければならないのである．

現代見られる子ども達の問題は，本質的には，子どもの内面の問題であるため，専門家による外枠“outer frame of reference”にそった理解では，実践的援助活動の基本である信頼関係－ラポート－（rapport）さえ結べないのである．人間性は，人間的触れ合いを通じてはじめて，成長・発達するため，内面の理解などは重要であり，人間の触れ合いは，信頼関係－ラポート－(rapport)の中で，初めて効果がでるものである．重要な信頼関係－ラポート－（rapport）を作る際には，前述したボルノーの論じる，教育者の姿勢が大きく，重要な手がかりとなり，根底となるのである．この中で，子どもは，自分自身を見つめ直し，自己実現をしていくのである．子どもをボルノーの示した庇護の雰囲気の中で，自分自身を見つめさせ，気づかせる（awareness）ことができるのである．そして，援助者は，子どもを間接的に目的となる方向へ，刺激を与えるべきである．

具体的に，ラポートを作るために相手の要求に応じた雰囲気・話題・話し方のスピードなどで，気持ちを受け止めていく姿勢が必要である．話題とは，常に子どもの興味や背景に，関心を持つことで得られるものであり，相手の内面を，引き出すきっかけになることが多い．また，人間学的教育学は，学校や社会とはかけ離れて考えているという指摘もあるが，子どもとそれらは切り離せないものである．そのため，学力の低下，社会体験の欠如を認識し援助する必要もある．内面的問題が解決し，家庭内の状況などが好転しても，学力低下や社会経験の欠如などは，学校復帰や社会活動面のブレーキになってしまう場合が多いのである．

子どもの問題は，一つ一つに真摯な姿勢で取り組み，解決に向けて援助していく，総合的なものが求められているのである．援助法を狭く限らず，子どものニーズに

応じて，豊富な社会資源を十分に活用し，多面的で，総合的な活動が必要である．また，子どものニーズは，本来一人一人異なるものであることを忘れてはならない．精神分析や行動療法のようにあらかじめ決められた固定的な治療目的や技法がないことが特徴であり，マニュアル化しやすい性質の技法や方向性ではないことが人間学的教育学理論の特徴ではある．しかし，価値も倫理も確実に存在し，曖昧性を伴うために，子どもの中で進行しているプロセスを把握できるのである．また，子どもを取り囲む社会は，日々変化していくことから，子どものニーズも変化していくことを認識することが必要であり，常にこの変化に対応した適切な援助が行えるように，知的・技術的に研鑽していく必要と人間形成に配慮する必要がある．また，一つの援助法に固執することない，多面的な柔軟な姿勢を持つことができる必要もある．

人間学的教育学を現代的意味と役割について考察するとき，いくつかの課題が浮かび上がってくる．人間学的理論では，人間を数量的なもので図ることはできないため，この理論を学んだ者の間にも，質の違いがあり，援助者の主観的見解を重要視するため，時には非援助者の理解の妨げになることも考えられる．また，非援助者の内面状態の変容に重点をおく傾向をもつため，外界環境への働きかけが軽視され，その結果として，非能率的にみられやすいという問題もあるのである．そのため，より良い援助者の養成，非援助者の中でおこるプロセスを人間的に正しく感じる方法をいかにして身に付けるかが，重要な課題となるのである．援助者自身が，日頃から自分自身の内面的成長を心がける必要と，自己教育への視点が独り善がりにならないよう，他者との人間的体験から自分自身を見つめることも重要である．

これらの課題は，建設的な科学や技術，新しい知性によって，また新しい社会体制や組織，それに見あった教育制度や内容によってこそ，解決を考えるべきだという観点からの批判がある．たしかに，批判にあるように，現代の文化・社会等の危機を個人の問題に全てあてはめ，解決していこうという考えは，一面的でありすぎるのは事実である．しかし，人間学的教育学への接近を，全く無視することは，教育，人間学的課題から考えても，閉鎖的，一面的であるといえるのである．

現代の人間本性の急激な変化に危機感を感じているものは多く，経済的な豊かさに反比例して増加している子ども達の人間性の喪失や心理的問題の増加という危機的現代において，子どもへのより良い援助を考えるならば，人間学的教育学は人間観，教育観の一つの視点として，改めて貴重な示唆を得られるであろうと考えられる．

注

1）学校基本調査報告書　文部省
「学校不適応対策調査研究協力者会議」1992
2）「児童心理」1994-1996
「小児の精神と神経」1990 No.30.31，1989-98 No.28.29
日本教育心理学会「総論文集」「年報」
「教育心理学会研究」機関誌
日本カウンセリング学会「大会論文集」
「カウンセリング研究」機関誌
日本児童青年精神医学会
「児童青年精神医学会とその近接領域」機関紙
3）同 2)
Johnson.A.M.et.al : Scool Phobia American Journal of Orthopsychit 1941
Eisenberg.L : The pediatric management of school phobia
Journal of Pediatr 1959 : p.55, p.758
森田洋司「『不登校』現象の社会学」学文社 1991
4）同 1)
5）茨城県総和町立南中学校
6）O.F.Bollnow: 浜田正秀訳『人間学的に見た教育学』(Anthropologische padagogik) 玉川出版部 1973 p.33
7）I.KANT. ：三井善止訳 『人間学・教育学』(Anthropologie in pragmatisccher) 玉川出版部 1986
8） Ibid.
9）川瀬八洲夫著「人間－主体的自己の形成」相川書房 1999 pp.187-88
10）同 6）pp.56-57
11）Ibid
12）同 6）pp.59-60
13）同 6）p.63
14）Ibid.
15）同 12)
16）同 6）pp.81-82

17）同 9）pp.195-196
18）Ibid.
19）不登校・ひきこもり児童対策モデル事業 1992

参考文献

1．O.F.Bollnow : 浜田正秀訳 「人間学的に見た教育学」Anthropologische padagogik ; 玉川大学出版部 1973
2．「児童心理」1994-1996
3．「小児の精神と神経」1990 No.30.31, 1989-98 No.28.29
4．日本教育心理学会「総論文集」「年報」
5．機関誌「教育心理学会研究」
6．日本カウンセリング学会「大会論文集」機関誌「カウンセリング研究」
7．日本児童青年精神医学会 機関誌「児童青年精神医学会とその近接領域」
8．「児童心理学の進歩」 金子書房
9．川瀬八洲夫著「人間－主体的自己の形成」相川書房 1999
10. 川瀬八洲夫著「教育と社会」垣内出版株式会社 1991
11. 川瀬八洲夫著「人間-その生と形成」 相川書房 1993
12. Johnson.A.M.et.al : Scool Phobia American Journal of Orthopsychit 1941
13. Eisenberg.L 1959 : The pediatric management of school phobia Journal of Pediatr p.55, p.758
14. D.Yagi:「スクールカウンセリング入門」(The school counsering) 剄草書房 1998
15. R.May：小野泰博・小野和哉訳「失われし自己を求めて」(Man's Search For himself) 誠信書房 他

Summary

This is the paper that we discussed about the children suffering from serious stress of psychosormatic problems, of non-attendance, shutting himself (herself) in house, ill-treat, abuses, deliquency, suicide etc. at the present Japanese modern affluent society.

Now we have the society of compound distortion due to a kind of school, home, human relation, the reverence for nature and life, a capacity of creation, a wealth of sentiment have not been formed in the children at present society.

The inclination of un-humanistic attitude and mind is spread on the children's world.

The theory of humanistic education is considered to be very effective for the children in the crucial state under the situation like present Japanese atmosphere.